

# 空中回廊

第8号

A I C H I  
P R E F E C T U R A L  
M U S E U M  
O F A R T

愛知県美術館友の会 会報

私のこの1点  
所蔵作品から

美術館のページ  
雪山副館長を迎えて

1  
2  
3  
4

私の行った美術館  
かみや美術館  
杉本美術館

事務局から

A I C H I A R T S C E N T E R



## 私のこの1点

愛知県美術館の所蔵作品から

愛知県美術館の所蔵作品のなかから、  
会員の皆さんに「私のこの1点」というテーマで、  
好きな作品、気になる作品を取り上げ、  
ご紹介いただきます。

### ジョージア・オキーフ 《抽象第6番》

村山 るみ

闇の中から沸き上がる幾重もの襞、私にはこの絵がクローズアップされた花の断面図に見える。

事実ジョージア・オキーフは、1920年代から描き始めた蝶や蜂の視点で花を拡大する独自の画法でよく知られている。忙しいニュー Yorker でも時間をかけて見られるように大きく描いたそうである。

この《抽象 第6番》は実際には具体的な対象をモチーフにしたものではないらしいが、見る人に自由な想像を楽しませる、不思議で官能的な作品である。



ジョージア・オキーフ  
(1887-1986)  
《抽象 第6番》1928年  
81.5×53.5cm



北山善夫(1948-)

あなた  
《私。》1992年

愛知芸術文化センター所蔵

撮影：木之下晃

### 北山 善夫《あなた 私。》

板倉 あけみ

空間に舞い上がり心地よい風を受けてたなびくオブジェ、そこは空地だろうか。想像するだけで楽しい気持ちになれる（私）。

芸術文化センター2階から10階にわたる吹き抜け部分にその巨体を現している北山善夫の作品、しかしこのような巨大な作品であるにもかかわらず、威圧感不思議と感じられない。むしろ建物の一部であるかのように、自然に周りの空間と融合している。とはいえ、どことなく気にかかる存在である。

北山の作品の多くが竹、和紙などといった、私達日本人にはなじみ深い素材で作られているからであろうか。あるいはその作風が軟らかな雰囲気醸し出しているせいだろうか。感じ方には余計な理屈はいらない。いずれにしろ作品自体から強力な自己主張が感じられず、芸術の館に見事に調和している。そして巨大な作品であるにもかかわらず、しっとりとした安らぎを感じさせる。北山善夫の作品の面白味、こんなところにあるのではないかと思う。

## エドワード・ジョン・ポインター 《世界の若かりし頃》

### 水野 裕之

絵画に関する難しい技法とか、専門的な事は解りませんが、ポインターの《世界の若かりし頃》には、「いいなあ」と体感させていただきました。

《世界の若かりし頃》という題名から受ける印象としては、なつかしさや初々しさが浮かぶと思いますが、この作品からは初々しさに輪を掛けた生命力、「さあ、これから」という期待、何よりも未来に対する可能性を体感させていただきました。

県美の名刺代わりとっては失礼かもしれませんが、「未来への可能性」という点では、今の県美の姿勢とフィットするような気がします。

子供から絵に興味の無い大人まで、誰が観ても「素敵だなあ」と思える私のこの一点。僕がもう一度会いたいこの一点に、ポインターの《世界の若かりし頃》を上げたいと思います。

### 杉浦 輝章

以前取り上げられた事のある作品だが、愛知県美術館にはこの種の作品は少ない。素人の私はこのような16世紀イタリア・ルネサンス美術を感じさせるようなものが好きだ。

窓辺にまどろむ女性は平和な安らぎを与え、水辺に寄る女達の表情は何となく気品にあふれ、その柔らかそうな肌は夢の世界への案内役という感じだ。右側にあるヘビの噴水が、これらとは対照的にあやしげな様相をかもし出している。この絵が納められている額も、一風変わったデザインのもので、作品と一体化されていると思われる。

19世紀に描かれた作品でありながら、古き美しき時代を感じさせるこの絵は、ブランド物に多くの人が惑わされている現代に、それほど有名ではないが、私にとっての心休まる作品としてあえて取り上げた。



エドワード・ジョン・ポインター (1836-1919)  
《世界の若かりし頃》1891年 76.2×120.6cm



ダスタフ・クリムト(1862-1918)  
《人生は戦いなり(黄金の騎士)》  
1903年 100.0×100.0cm

## ダスタフ・クリムト 《人生は戦いなり(黄金の騎士)》

小嶋 元枝

芸術文化センターとして新しく生れ変わった平成4年、新設されたビデオ室で子と共に最初に見つけた作品がクリムトの《人生は戦いなり》だった。

草花は楽しく歌い、緑樹は金色に光る。戦士は黄金の甲冑に身を固め、きりりとして闘争心に燃えている。行手を阻む蛇を蹴散らす駒の右足は軽快なリズムで動いている。楽園と騎士、写実と工芸的装飾が豊かで、全てのものを溶かし込む美しさがある。

12月に「NHK新日曜美術館」でクリムトの《人生は戦いなり》が紹介され、描かれた経緯が解説された。1894年、ウィーン大学講堂の天上装飾の委託を受け、斬新な構想で制作。テーマ、様式が旧弊な美術界の不評を買い、一部を残し削り

界への内なる戦いに挑み、《人生は戦いなり》を発表。左隅の蛇は「教養の俗物」を表現したという。

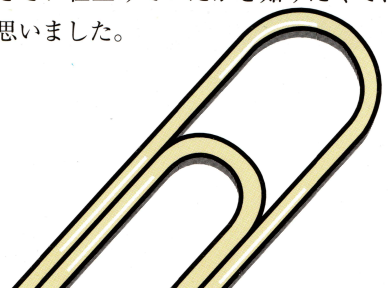
剥がされ未完となる。1897年、ウィーン芸術家協会を脱会し「時代に芸術を」「芸術に自由を」のローガンで「分離派」を結成。1903年、第十八回分離派展でウィーンの形骸化した文化の再成と、美術

界への内なる戦いに挑み、《人生は戦いなり》を発表。左隅の蛇は「教養の俗物」を表現したという。  
芸術文化センターへ向うと、《黄金の騎士》に会いたくなる。描く世界に住まわせて頂いている今、一生をかけた心に残る作品、もう一度会いたい作品を描きたいと希っている。《黄金の騎士》に会えて良かった!!

中川 幸子

先日、テレビでクリムトの《黄金の騎士》を見ましたが、それが県の美術館にあると知り、間近にこの目でつぶさに見てみたいと思いました。

ブラウン管を通して見たその絵は、クリムトがこの世の精神をかき乱す喧騒に対し、上からの視点で己が輝きつつ見下ろしている、その状態がとても印象的です。クリムト自身のその時の心の状態を、どんなタッチで、どんな風に色を重ねて、どれ位の大きさに仕上げていたかを知りたくて、じっくり見てみたいと思いました。



## 私の行った美術館

### ■かみや美術館

杉山 博之

10月のとある晴れた日曜日、半田市有脇町にある「かみや美術館」を訪れた。午前10時に何うと、ちょうど8名ほどの団体の方々と一緒になった。名古屋から来たという彼女たちは「絵が好きでよく美術館へ出かける」と話してくれた。静かな美術館を予想していた当方としては思いのほかにごやかな雰囲気の中で、館長の神谷さんのギャラリートークが始まった。

北側の壁面に並べられた北川民次の作品を見ながら、「民次の絵は一見、受け入れにくいけれど、よく見ると面白い」とおっしゃる神谷さんは、とても気さくな方で、来たる4月15日で開館15周年になること、その記念展に北川民次を80点ほど展示しようと思っていること、一番好きなのは村山槐多の《風景・松》であることなどを話してくれた。

しばらくして名古屋の一行が「民次をたくさん見ることができて、来た甲斐がありました」と言いながら引き上げてい



くと、入れ替わりに朝日新聞の記者がひとりで訪ねて来た。記者の用件というのは、「先日見せてもらった『書』をもう一度見せて欲しい」ということだった。その『書』とは、清朝の政治家、李鴻章の手になる《前田師表》で、是非調べて記事にしたいと話した。意外な成り行きに驚いていると、神谷さんは奥から細長い箱をいくつか抱えてきた。箱から出された『書』は、縦2m、横60cmほどの大きさで、12巻目には確かに李鴻章と署名されていた。記者は丁寧に写真を撮って帰って行った。

静かになった美術館で再び村山槐多と向き合っていると、神谷さんがそばに来て、「やはり絵は静かに眺めるものだ。今日は客が多くてくたびれた」と笑いかけてくれた。確かに絵は静かに眺めるものだと思いつつ、ふと時計を見ると、既にお昼を過ぎていた。

今回紹介した「かみや美術館」には、北川民次の作品が多数所蔵されており、それを知る愛好家がよく訪れる。その他にも古賀春江、浮田克躬らの作品が印象的だった。けれど、一番楽しかったのは、神谷さんが親しく話してくれたことだった。

開館時間：午前10時から午後4時

休館日：展示替期間中

入場料金：一般300円 学生100円

交通：名鉄知多新線 半田駅から緑ヶ丘行きバスにて春日山美術公園前下車すぐ

## 私の行った美術館

### ■杉本美術館「杉本健吉のこころ」

伊藤 淳子



秋の晴れた日、杉本美術館を訪れました。入り口では、楽譜に止まった眼光鋭い鳥たちが迎えてくれました。

この美術館は、杉本健吉氏が作品をどんどん創り出していく中、保存する場所が

必要になり「お蔵を作ろう、それなら美術館にして見て頂こう!」ということで、作られたそうです。

新館には《空海像》を中心に、二つの曼陀羅が展示されています。この作品はじっと見てください。何度も見て、他の部屋を回ってからもう一度見てください。毎回少しずつ発見があります。あまり背の高い作品なので、下の部分は別の場所に展示されることがあります。「仏様は、仰ぎ見るもの」とのお話でしたが、お顔から「もっと近くにいらっしやい」というメッセージを感じるのは私だけでしょうか。お一人お一人丁寧に拝見すると…?! お楽しみに。

・レクチャールームでは、夏休みに地域の子供たちから作品を募り、展示されたこともあるそうです。

常設展示室では、「何でも作品になっちゃう

のねえ」という声が聞こえてきました。紙コップに目を付けたり、空海像の制作時にできた端材に描いたり、本当に何でも作品へと変わっていきます。創作する楽しさが伝わってきます。

当日は開館11年目にして12年間働いていらっしやる鈴木威学芸員からお話を伺いました。「先生は“洋画家”のですか?」という問いに「一応、洋画家でしょう」と笑いながら「杉本は常々、自分のことは“職人”だと言っています」との答えでした。職人氣質、職人芸…いい言葉ですね。

中庭には、不思議なアンテナが建っています。足元にはこんな文字が。

「美術館は作品の電波を受信者に伝えるパラボラアンテナの役を致します。作品は所詮見る人の感度に頼るしかない。」

踊る埴輪から、無骨なマスクから、にこやかな天女から、私たちはどんな電波を受け止めるのでしょうか。新春からは金屏風がデビューしました。紅白の梅が咲きそろう頃、お出かけになりませんか。

開館時間：午前9時30分から午後4時30分

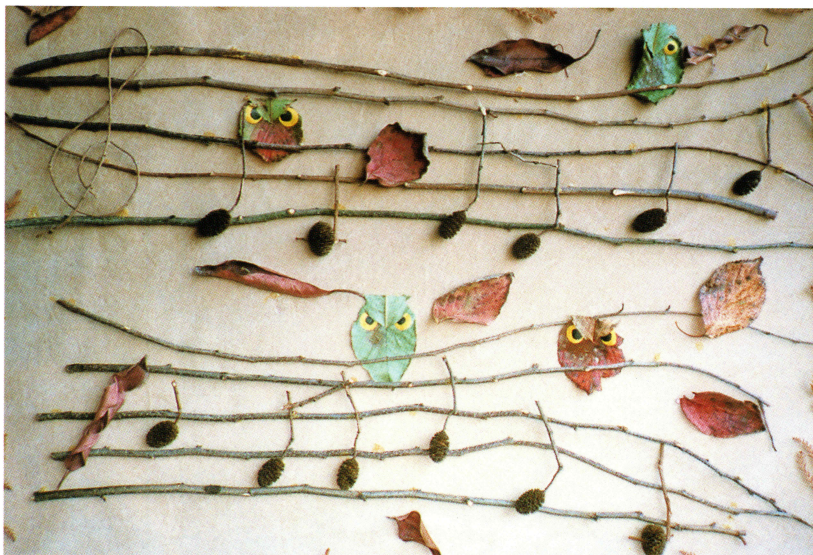
(但し、入館は午後4時まで)

休館日：毎週水曜日(但し、祝日の場合は翌日休館)

入場料金：一般900円 高校生400円 小中生300円

交通：名鉄知多新線、美浜緑苑駅から徒歩5分

南知多道路美浜インターから3km



昨秋、愛知県美術館においでになられた雪山副館長に、名古屋の印象やこれからの美術館などについて、お話をうかがいました。

#### —まず、簡単に自己紹介をお願いします。

わたし、雪山行二は昭和22（1947）年の2月6日に富山県で生まれて、幼稚園のころから東京に暮らしていました。

昭和51（1976）年3月に東京大学大学院修士課程を修了。スペイン美術史、特にゴヤが専門です。なぜかスペインが好きなのです。

昭和51年の4月から平成10（1998）年の9月末まで、東京の国立西洋美術館に勤務しまして、新展示場などの完成を機に、10月1日附で愛知県美術館に移りました。それまでに担当した展覧会には、「エル・グレコ」（1986年）、「ウィリアム・ブレイク」（1990年）、「スペイン・リアリズムの美、静物画の世界」（1992年）などがあります。「エル・グレコ」と「スペイン・リアリズムの美」は名古屋でも開催されました。目下、西洋美術館でわたしが手がけた最後の企画である「ゴヤ、版画にみる時代と独創」展が開催されています（3月7日に終了）。

#### —名古屋の印象はいかがですか。

10分ほどの自転車通勤をしているので中心部のことしかわかりませんが、東京に比べるとすべてヒューマン・サイズというか、生活に適した規模をもって、暮らしやすい所のように見受けられます。わたしの通勤経路の途中にも、おしゃれな店が目につきます。女性のファッションは、やや保守的な。少し暖かくなったら、いろいろ探索するつもりです。

いわゆる「名古屋人」については、奥ゆかしいのか、強く自己主張する人も少なく、正体不明……。目下勉強中です。

名古屋の味と言えば、ミソナベと冷酒の取り合わせがよろしい。しかし、名古屋の究極の味（？）と言われてフナミソを試してみましたが、これは毎日食べるものではないと思いました。和菓子は一般にレベルが高い気がします。お酒については勉強中。

#### —これまで愛知県美術館を外からご覧になってきましたが、実際に来られてみていかがですか。

前の職場である国立西洋美術館が美術館だけの単独組織であったのに対して、愛知県美術館は愛知芸術文化センターの一機関であることから、仕事の勝手が幾分異なります。また、西洋美術館は国の行政の末端に位置していたため、行政との関係は希薄でしたが、それに比べると愛知県美術館は県行政に密着し

ている印象を受けます。これには一長一短があるでしょう。

館員は当然のこととは言え、たいへんよく働いています。各人社会的な常識をよくわきまえ、細かい点ではいろいろ問題もあるでしょうが、チームワークが大変良い。

一番驚いたのは、かつてあれほど裕福であった愛知県美術館が、お金に困っていることです。

#### —これからの美術館運営についてのお考えは。

不況下であればこそ、愛知県美術館全体の志気を高めることが重要です。館員がその能力を十分発揮できるような環境を作るように努めたいと思います。

しかし、美術館の活動は館員だけで成り立っているわけではありません。「業界用語」ではなく、社会の各個人と直接話ができる言葉を持たなければなりません。その意味でも、特に広報と美術館教育には力を入れたいと思っています。

財政問題には特效薬はありません。あくまでもわたしの個人的な考えですが、将来は愛知県美術館が独自の支援組織をもつのも、解決策のひとつではないかと思っています。

#### —友の会の活動について、企画展ごとの鑑賞会や会報はいかがでしょう。

企画展の鑑賞会には、これまで二度参加させていただきましたが、たいへん和やかで良い雰囲気でした。

『空中回廊』の第7号を拝読しました。会員の皆さんが美術に対する思い入れを語っていることには、たいへん好感をもちました。アーティストのエッセイとか、文学や音楽を含め、何か気の利いたエッセイが一本入ると、いっそう幅が広がるかもしれせん。

#### —今後の友の会と美術館の関係についてはいかがでしょう。

「友の会」と愛知県美術館は、それぞれ独立した組織であるから、基本的には対等の立場で協力し合うのが好ましい。美術館が財政難にある中で、今後「友の会」にいっそうのご協力をお願いしなければならないでしょうが、この件についてはいろいろお知恵を拝借したいと思っています。

#### —最後に、友の会会員を含めて、美術ファンにメッセージを。

不況であるからこそ、美術を含めて芸術を大切に考えていただきたい。展覧会など美術館の活動については、鋭い批評をして欲しいと思います。それが美術館の発展の力になるからです。

（編集：杉山）

## 1999年度企画展

新年度の企画展が決まりました。一昨年のイタリア現代美術展でも紹介されたメロッチェをはじめとする四人の作家の回顧展と、昭和初頭から太平洋戦争までの時代と絵画を検証する企画など、充実した内容で魅力ある展覧会をご覧ください。

### ファウスト・メロッチェ展

4月23日(金) - 6月13日(日)

イタリア抽象彫刻の先駆者ファウスト・メロッチェ(1901-1986)の60年に及ぶ活動を振り返る、日本初の回顧展。音楽理論を応用した前衛的な連作から、真ちゅうの構造体にさまざまな素材を組み合わせた作品群など、独特の詩的造形を紹介。

### 前田寛治の芸術

7月2日(金) - 8月22日(日)

東京美術学校卒業後にフランスに留学し、西洋美術の根底にある写実の精神を学び、大正末期から昭和初期の洋画壇に重要な足跡を残した前田寛治(1896-1930)の芸術を回顧。

### 危機の時代と絵画 1930-1945

9月3日(金) - 10月17日(日)

世界恐慌、ファシズムの台頭、世界を二分した戦争と、1930年から45年までの危機的な状況にあって、精神の奥深くで時代の不安や恐怖、哀しみを表現した日本の画家たち。彼らの残した作品によって、その時代と絵画の関わりを検証。

### 生誕100年 関根正二展

10月29日(金) - 12月12日(日)

幻想的で神秘的感情に満ちた作品が、個性的芸術家の多数活躍した大正期の美術史の中でも異彩を放つ関根正二(1899-1919)と、彼に前後して活躍した画家たちの作品との比較によって、「夭折の天才」と形容される関根の神話を再考。

### セザンヌ展

1月5日(水) - 3月12日(日)

20世紀美術の生誕に多大な影響を及ぼした巨匠、ポール・セザンヌ(1839-1906)。その初期から晩年にいたる画業を、「初期絵画」「風景」「人物」「静物」「水浴」というジャンルに分けて紹介。あわせて、セザンヌの芸術が明治末期以降の日本でいかに受容されたかを考察。

## 新年度の会員を募集しています!

### 編集後記

第8号をお届けします。先号から編集をお手伝いしていますが、今号は会員の皆様からいただいた原稿「私の1点」を中心に、美術館に昨年10月に着任された雪山副館長のお話や近隣の美術館紹介と、いつもより盛りだくさんの内容となりました。この会報がひとつの核となって、私たちの県美術館の作品への関心や美術鑑賞の機会が広がっていかばと思います。そして、来年度も沢山の方が友の会の仲間になっていただけることを願っています。ご感想やご希望をおきかせください。そして来年度、編集スタッフに加わっていただける方がいらっしゃいましたら声をかけてください。なお、お寄せいただいた原稿の一部は、編集の都合でやむをえず次号以降に掲載させていただくことになりましたので、ご了承ください。

(森健二)

前回から会報のお手伝いをさせて頂いています中野です。この会に入ったきっかけは、大学で愛知県美術館の栗田さんが講義をされたことでした。それで私はボナールの絵が好きになりました。皆様の好きな絵は何ですか。どうぞ原稿をお寄せください。また会報へのご意見、アドバイスなどお聞かせ願えましたら幸いです。よろしく願います。

(中野ともみ)

### お詫び

『空中回廊』第7号所収の北川昌子さんによる《砂の聖書》の文中に、編集段階で誤りがありました。お詫びして訂正します。

誤：《原爆の聖書》

正：《原爆の証言》

編集：宮崎玲子、杉山博之、伊藤淳子、中野ともみ、村山るみ、森健二  
編集協力：愛知県美術館企画普及課

### 発行

1999年3月  
愛知県美術館友の会 〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2  
電話052-971-5511(代) ファックス052-971-5604

デザイン・レイアウト：小谷恭二